

臨床現場における情報ニーズ

入手方法および適用に関する研究

阿部信一¹⁾ 大崎 泉¹⁾ 古関美津子¹⁾ 松島雅人²⁾

1)東京慈恵会医科大学医学情報センター

2)東京慈恵会医科大学内科学講座臨床研究開発室

目的：平成 14 年度に東京慈恵会医科大学附属病院総合診療部（以下、総合診療部）で行った調査では、日常の診療時に多数の疑問が発生しており、その内容や解決方法は医師によって様々であることが推察された。そこで、臨床医にとって有効な情報サービスや情報源について検討するために、臨床現場での情報提供サービスの実施と評価を計画した。

方法：総合診療部で協力を得られた医師に診療時に発生する疑問を調査票に記入してもらったものを回収し、データベースの検索、文献の選択を行い、提供した。医師は提供された情報について、当該患者の再診の後、情報の内容やサービスの質、診療行為への有効性等を評価表に記入した。

結果：2005 年 1 月 17 日～2 月 10 日の平日に調査を行った。調査票に記入された疑問は合計 9 件。内訳は診断に関するものが 5 件、治療または予後に関するものが 4 件だった。今回提供した文献や情報に関して、有益性については3分の1だけが「やや役に立った」と評価され、内容の適切性や診療行為に対する効果はほとんどなかった。

考察：今回の調査では約1ヶ月間の調査期間を設けたが、インフルエンザ患者の混雑と重なったことなどによって、調査票を回収できたものは9件に止まった。本来、このような情報提供サービスは医師が忙しい時期にこそ求められるものであるが、診療の合間での疑問の提示方法などについては改善の余地が多いと思われた。疑問の内容は診断に関するものと治療に関するものとで半分ずつであった。今回提供する文献を選別するに当たっては選択手順を定めたが、図書館員が適当と判断した文献や情報に対する医師の評価は全体的に低かった。これはそもそも求められたアウトカムを報告した臨床研究がないことも考えられるが、各医師の評価の中には、医師からの疑問の提示方法や図書館員からの検索方法などに対する意見も出されていて、臨床で求められる情報の性格や背景などに関する基本的な理解が足りないのではないかとも思われた。また、今回はできるだけ速く情報を提供することを優先したため、あまり網羅的な検索を行わなかったが、疑問によっては多少の時間をかけても継続的に調査を行ったり、参考文献を参照したいものもあったようである。なお、コスト面での評価は今回のデータだけでは判断が難しいが、図書館員の調査に要する時間としては通常の検索業務の範囲内と思われた。

結論：今回の調査では臨床現場での情報提供サービスを行うためには、効果的なコミュニケーションや図書館員のトレーニングが必要であることが示唆された。今後は、より適当な時期を選んで同様の調査を行い、より多くのサンプル数による分析が必要であるほか、他の専門診療科での同様の調査による情報ニーズやサービスの検討が必要である。

なお、本研究は平成 16 年度厚生労働科学研究費補助金事業「患者／家族のための良質な保健医療情報の評価・統合・提供方法に関する調査研究」の分担研究として行った調査を基にまとめたものである。